

## 腹たてずの会

西郷隆盛や岩崎彌太郎といった人は、それぞれ、島津齊彬、吉田東洋という人に見出され、密偵のようなところからスタートした人ですが、密偵の資質としては、頭脳と度胸・・・ともう一つ、悪い情報でも上に上げる剛腹さがあります。この点を、ファン族を率いたアッティラ大王は「悪い報告をした部下を褒めよ。悪い報告をしなかった部下を罰せよ」と言った。しかし、いつの時代も、上司が不機嫌になる報告というのは、たとえ、後で問題になるとわかっていても上げたくないのが人情。結果、放っておくとトップには耳障りな話、まずい話というのは入ってこなくなり、気がつけば、裸の王様になっている・・・。

この点を憂慮し、黒田如水の黒田家では、殿様が「裸の殿様」にならないように、重役会議の席上で殿様に耳が痛い話をする「腹たてずの会」というのをやったそうです。でも、まさか智将如水に文句は出ないだろう・・・と思っていたら、結構、出たそうで、それが、「人の話を最後まで聞け」だったとか。（名将・小早川隆景は如水に対し、「貴殿はあまりに頭が良く、物事を即断即決してしまうから後悔することも多い。私は貴殿ほど優秀ではないので、十分に時間をかけたうえで判断するから案外後悔が少ない」と言ったとか。田中角栄も同様のことで盟友・大平正芳からたしなめられたという話も。頭の回転が速い人には共通する現象なのでしょう。）

で、この腹たてずの会ですが、結局、長続きはしていないんですね。やはりトップに対して嫌ごとを言うのは勇気がいることで、普段、「悪い情報を伝えろ」と言っている人に限って、いざ、伝えたらと怒る・・・と。（ある医学部教授が「手術で私の腕に衰えが見えたら言ってくれ。第一線を退く」と言ったので、衰えを指摘したらすぐに飛ばされた・・・という話も。）部下も自分がバカ見るなら言うだけ損で、トップの側が我慢強く維持していくことを留意しないと・・・。

一方、三十代の徳川家康は、武田信玄と激闘を繰り広げている間、殆ど主要家臣に裏切り者を出していないんですね。恐るべき統率力です。その秘訣の一端を垣間見る話があり、家康が腹心の家臣と打ち合わせ中、別の家臣が意見具申に来たところ、家康は打ち合わせを中断して話を聞いた。で、その家臣が退出した後、腹心が「別に大した意見ではなかったですな」と言ったら、家康は「わかっている。用いる、用いないは別として聞いてやらないと言ってこなくなる」と言ったとか。しかし、実際には、家康もかなり面倒臭かったはず。ただ、少なくとも、すぐに「それはわかっている」と言う如水とは対照的で、こ辛抱という点では家康が一枚上だったということかと。（小説家 池田平太郎）

## 『猿蟹合戦』に見る真のチームワークとは

乱暴者の猿が蟹から柿を奪い、ついには命まで奪ってしまう。そして蟹の子供たちが仇討ちを行う。これは昔話『猿蟹合戦』です。日本人なら知らない人はいない有名なお話です。勧善懲悪の仇討ちモノとして、長い間愛されています。蟹の子供たちと一緒に仇討ちをするいわゆる「助太刀」は、地方や時代によって違いますが、大まかな筋は変わりません。

この『猿蟹合戦』は、チームワークを学ぶ教材としても優れたお話です。必勝の秘訣が詰まっています。まず、最終目的の設定です。この場合は蟹の親の命を奪われたのですから、それと同等のことを猿に行うことが最終目的です。

そのためにできることを、蟹の子供たちは着々と行いました。最初に行ったのは、猿の悪行を言いふらすことです。情報伝達ですね。親の仇ですから、感情的で構いません。やられたことを滔々と語ることで、同情し助太刀もしてくれる人を見つけます。理不尽に怒る人は案外多いもので、現在でもSNSでの炎上も同情からの怒りで起こることが多いです。

このように周囲を扇動することが、実はチームワークを整えるのに大切なことなのです。目的を同じくする人が集まりやすいからです。例えば現代なら、草野球チームのメンバーを集めるとします。この時に「OOというチームに必ず勝ちたい!」といった感情的な目的を周囲に伝えるだけで、賛同してくれる人が集まる可能性が出てくるのです。何もしないなら、人は集まることなどありません。言葉にしなれば、何も無いと同じですから。

人が集まってきたら、今度はその人達の能力に合った配置を考えます。『猿蟹合戦』でも重たい臼は天井から落ちてくる蜂は刺すといったように、それぞれに能力に合わせた配置で猿を追いつけていきます。これがもし臼に刺すことを命じたとしたら、蟹の子供たちは本懐を果たせなかったでしょう。これもチームワークを整えるのに必要なことです。人間はそれぞれ持っている能力が違います。個性も違いますから、それを見極めてこそお互いを尊重して行動をとることができるのです。

能力を考えなかった場合、ミスが増え、チーム内の雰囲気ギクシャクしたものになるでしょう。失敗したことを責めないにしろ、時間のロスができてしまいますから。これを避けるためにも、能力は見極めたいものです。

あなたがもしチームワークで悩んでいるなら、同じチームの人と『猿蟹合戦』について感想を言い合ってみるのも手ですよ。（コラムニスト ぶじかわ陽子）

## 届いた種の謎？

後期高齢者の仲間入りを契機に、免許を返納した。娘たちからも、資産もないのだから、万一、人身事故でも起こしたら賠償責任も負えないので・・・と、きつく言われていた。

車は3年前、ミッションが損壊したのを契機に手放したものの、時折、レンタカーを借りて乗っていた。

今では、タクシーや電車がたよりだが、車を保有していた時よりは出費は少ない。特に、コロナ禍でスティホームが続くとよけい外出の機会が少なくなる。

車がないので、買い物もネット経由が主流になった。食材も冷凍お取り寄せが増えた。冷蔵庫の冷凍室では足らなくなり、最近、冷凍庫を買った。冷凍食品も冷凍技術が進歩したようで、かなり美味しくなっている。ラーメンや餃子はもっぱら冷凍食品になった。

そんなわけで、駐車場のスペースが空いたので、ここを花壇にしている。当初は、野菜も作っていたが、プランター栽培ではうまく作れず、今は、生ジュース用のケールとえんどう豆以外はやめて、花が殆どになった。花なら、農業も気兼ねなく使えるので、そこそこ上手く育てられる。

花苗や花種も通販たよりだが、注文した時期と届く時期に乖離がある場合が少なくなく、重複注文などが間々ある。

そんな中、中国から小さなねずみ色のビニール袋で包装された黒い種が届いた。注文した覚えはないのだがと、訝ったもののプラスチックカップに種まき土を入れ、蒔いた。

そんなおり、新聞で、同じように中国から種が届いたが蒔かないで届け出るようにとのニュースを見た。中国や東南アジアで動植物栽培のコンサルタントをやっていた経験のある飲み仲間である知人A氏に聞くと、危険性も考えられるので、蒔かないで届け出たほうがいいとのアドバイス。

農林水産省の防疫機関である植物防疫所は7月30日、注文していない植物が郵送されても開封しないよう注意喚起を発表している。

まだ芽が出る前だったので、ピンセットで掘り出し、高温焼却すれば問題ないだろうと思いき、通常のゴミと一緒に出した。ところが2つほど土の中に残っていたようで、芽が出てきた。プラスチックコップの中なので、外部に影響なからうと、しばらく様子を見ることにした。どうやら野菜ではなく花か雑草のようである。種まき土は栄養分がないので、育ちは遅々としているし、葉の端が黒ずんできた。もう少し様子を見て、廃棄しようと思う。

今回の種騒動について、中国当局は郵便物に記載された「中国郵政」の文字は偽造で、情報にも多くの誤りがあると、調査するとしているが、結果が判明したとのニュースは今のところ、見当たらない。

アメリカでも同様の騒動が起きているようだ。現在、米中で貿易制限やデジタル技術、情報漏えいなどで揉めているが、今回の騒動には、それそうおうの費用もかかっていることから、この謎を誰か解き明かしてほしいものだ。

ひょっとすると、種が送られてきた人の個人情報はずでに中国当局に把握されデータベースに収録されているという(中国以外の国や企業からの)警告かもしれない。最近、日本のアマゾンで購入しても中国から届く商品も少なくないので、その(警告目的)可能性は否定できない。(ジャーナリスト 井上勝彦)

広告